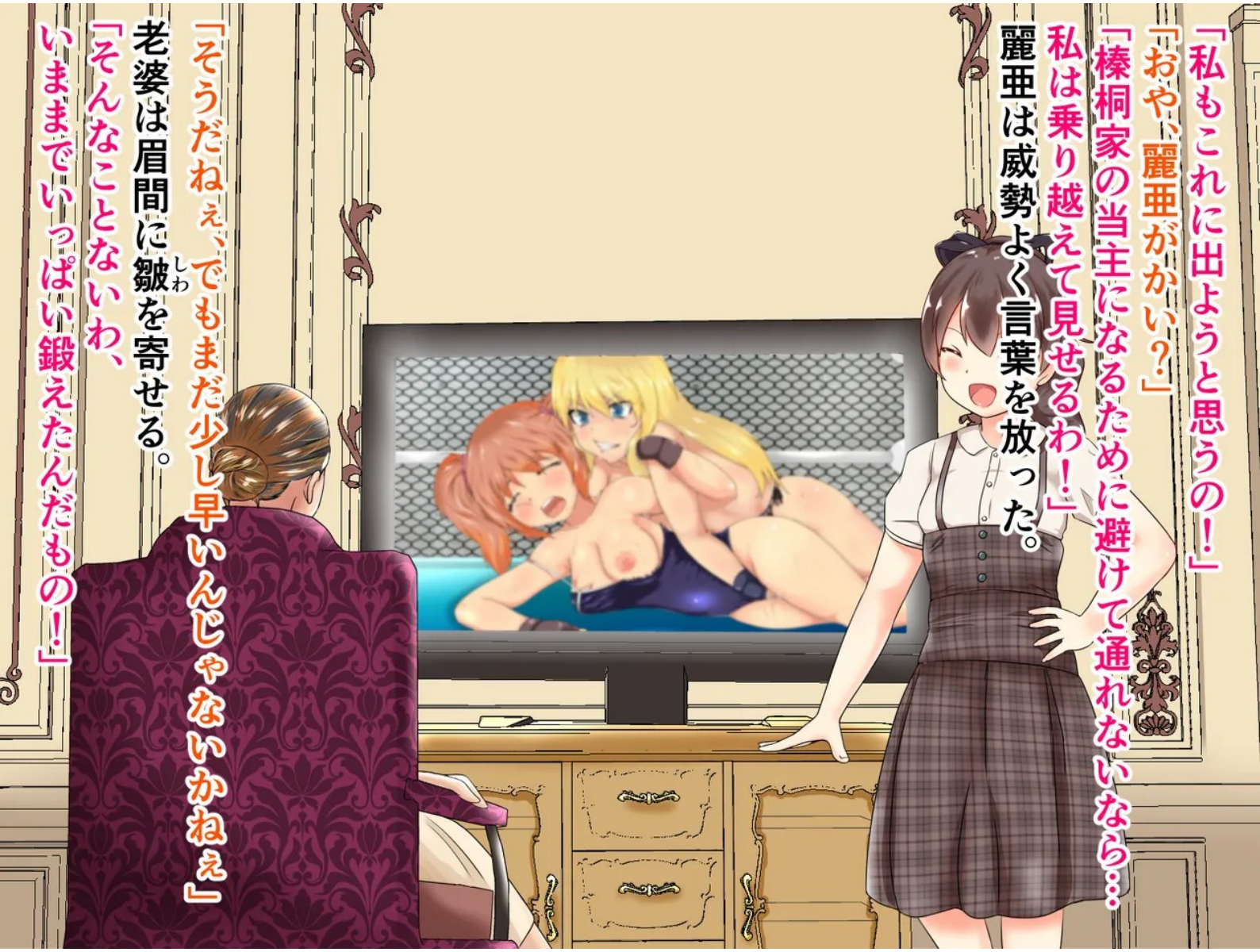
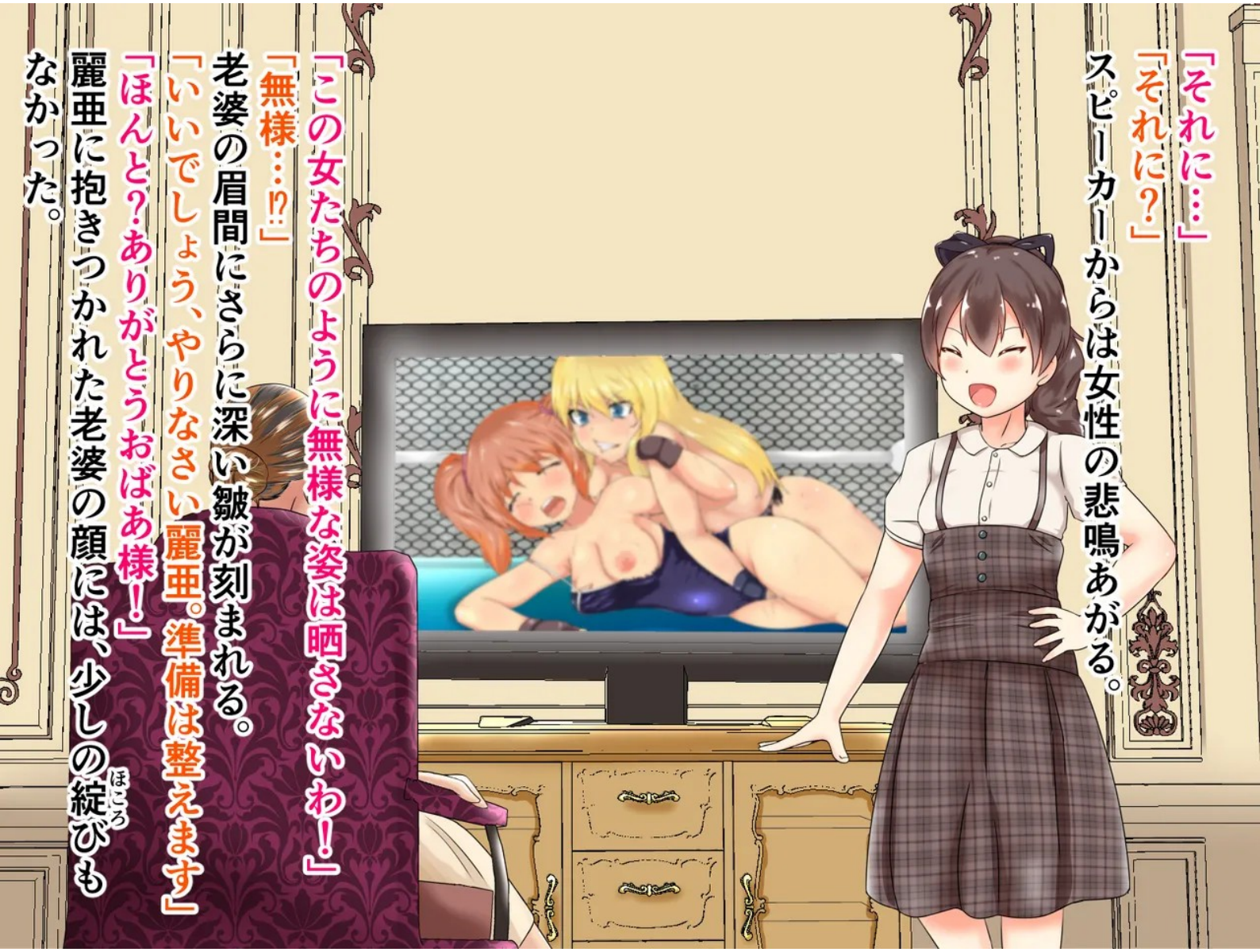

Valkyrie Fight
03
CG13枚（18シーン）
本編74枚
+文字無し差分
全裸差分
おまけ

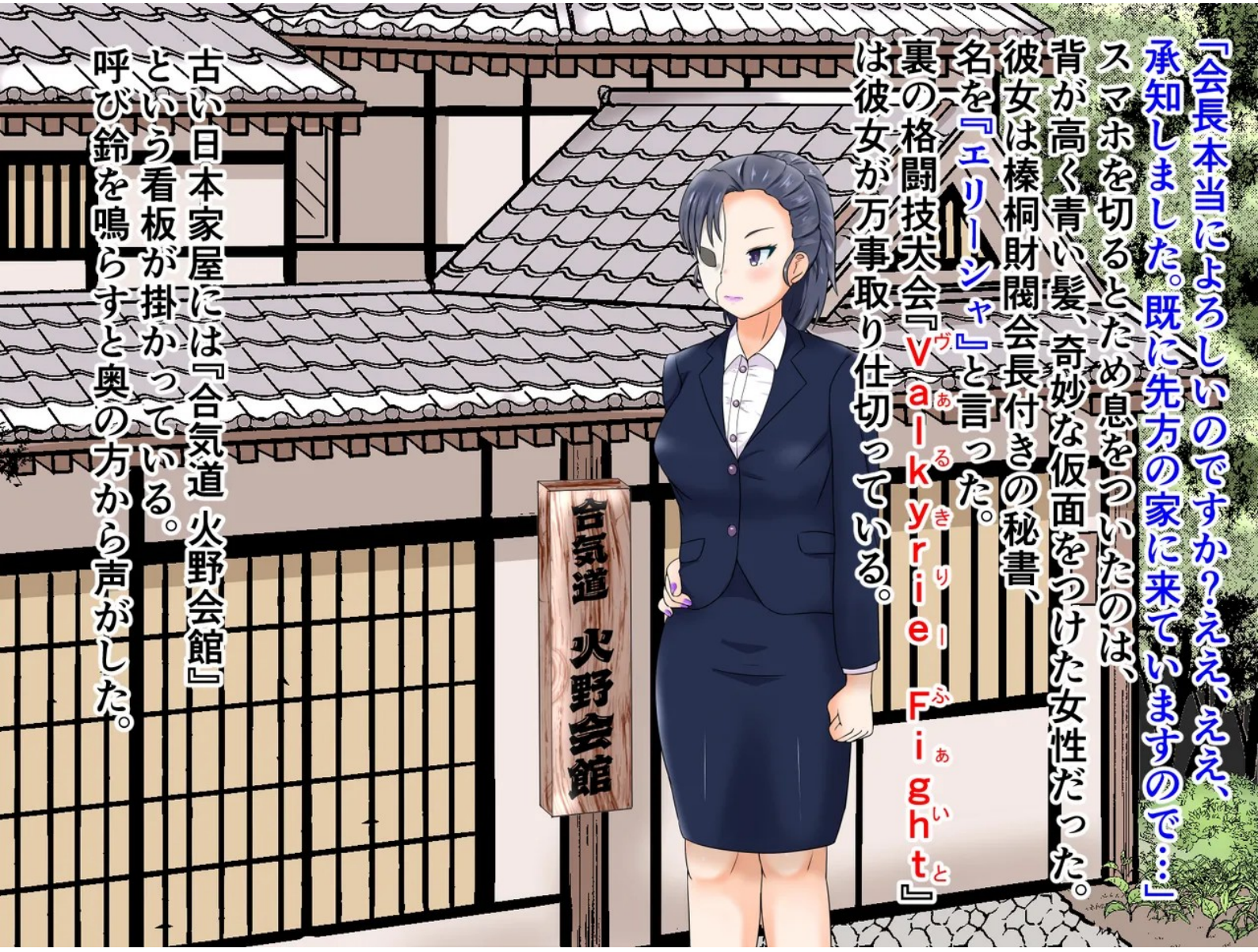

Name:エリーシャ
Age：26？
Style:？
本編中のセリフ：青
会長付の秘書であり、謎多き女性。
顔の右側に大きなキズがあり、
それ故か奇妙な仮面を被っている。
裏の格闘技「Valkyrie Fight」は会長の
指示を受け、諸事万端は彼女が整えている。
Name:榛桐富子（はるきり・とみこ）
Age：60代
Style:榛桐流古武術
本編中のセリフ：橙
榛桐財閥先代当主であり現会長、
麗亜の祖母でもある。
現職を退いてなお影響力は強く、
恐れられている。
Name:榛桐麗亜（はるきり・れいあ）
Age：JC?
Style:榛桐流護身術
本編中のセリフ：赤
榛桐財閥の娘、彼女の母は現当主
である。
しかし女系一族である榛桐家の
当主は心身共に剛健であることが
求められ、当主をめざす麗亜は
裏の格闘技「Valkyrie Fight」で
実力を示さなければならない。
Name:火野鞠子（ひの・まりこ）
Age：25
Style:合気道火野流
本編中のセリフ：緑
普段は温和な佇まいだが、内面は
好戦的で、「Valkyrie Fight」の
リングにしばしば上がっている。
合気道の師範であり、一流のさばき
を見せるが、時々わざと打撃を
喰らう節もある。
彼女の中では制圧も痛みも等しく
快楽なのかもしれない。

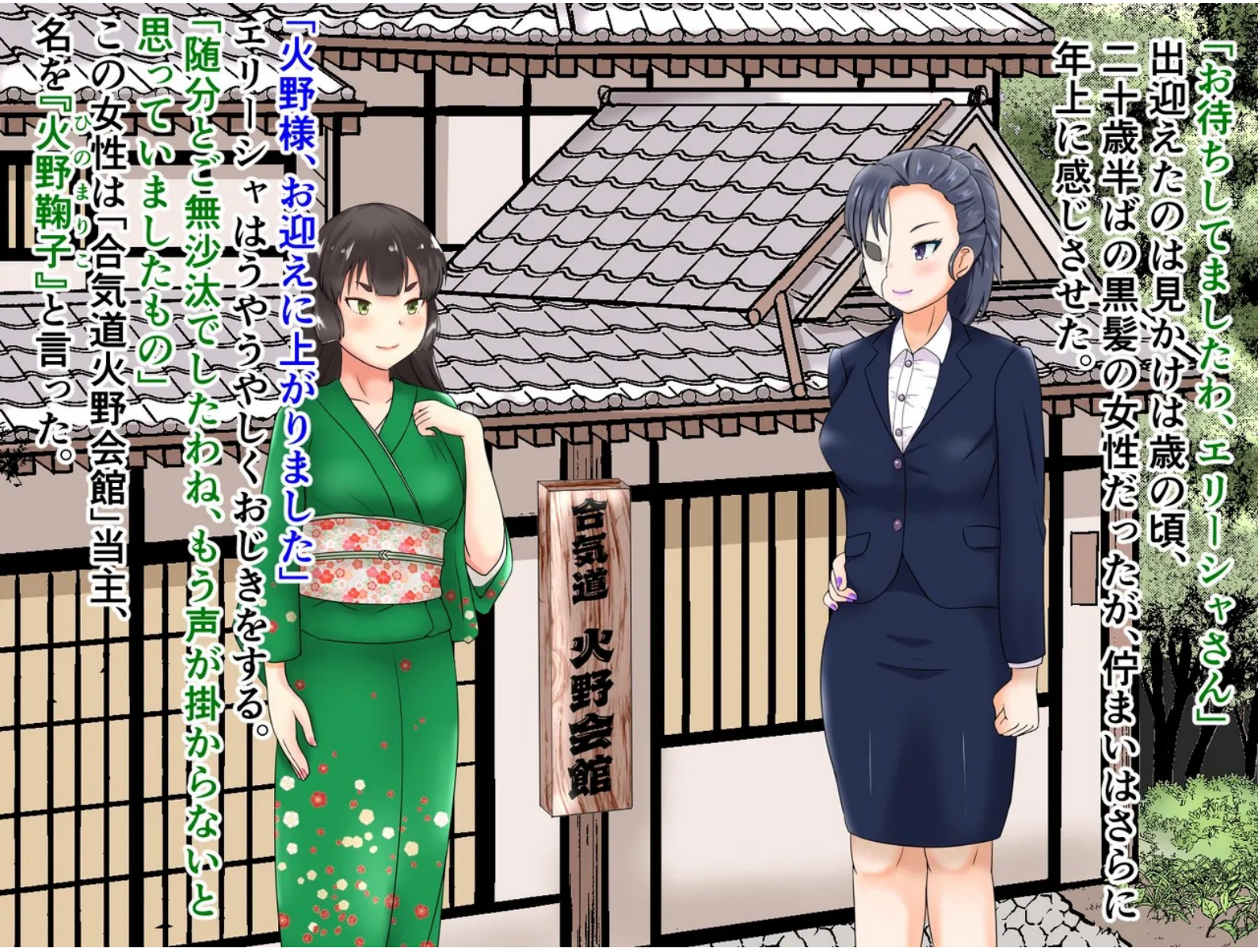

「おばあ様、また観てらっしゃるの？」
中学生くらいの見た目をした少女が、椅子に深く腰を掛けた老婆に話しかけた。
ドン
「おや、麗亜（れいあ）かい？ダメよここに入っちゃ」
大きな液晶スクリーンには、和やかな会話に似つかわしくない、女性たちが痴態をさらしながら争う姿が映し出されている。

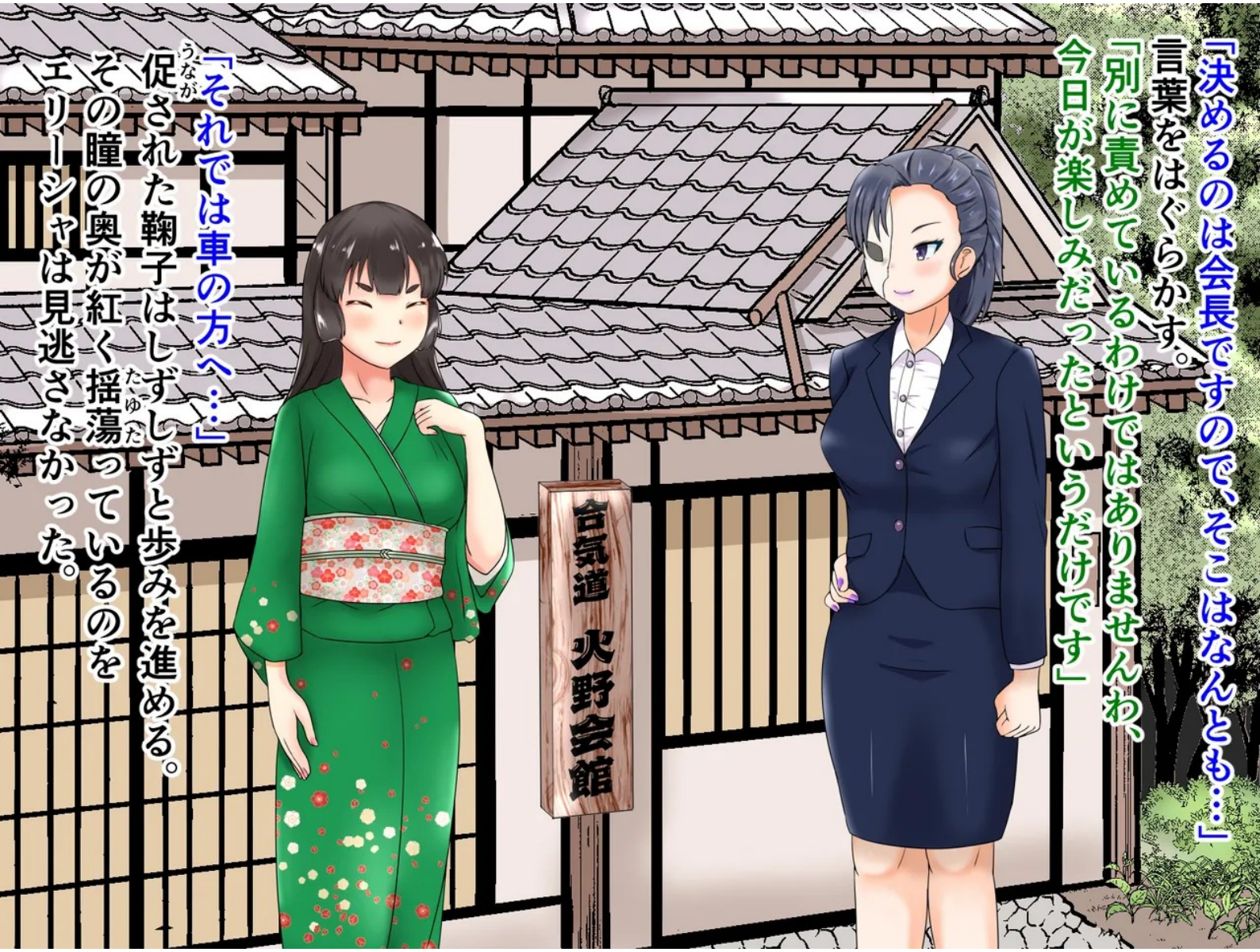

麗亜と呼ばれた少女はぴょんとスクリーンの前に躍り出た。
「おばあ様もお母さまも、これにでたんでしょう？」
「そうだよ、麗亜」
老婆は言葉を繋ぐ。
「榛桐家の当主はたるものは強くなきゃいけないのさ」
「でね！でね！おばあ様！」
麗亜は忙しなく動き回る。


「私もこれに出ようと思うの！」
「おや、麗亜がかい？」
「榛桐家の当主になるために避けて通れないなら…
私は乗り越えて見せるわ！」
麗亜は威勢よく言葉を放った。
「そうだねぇ、でもまだ少し早いんじゃないかねぇ」
老婆は眉間に皺を寄せる。
「そんなことないわ、
いままでいっぱい鍛えたんだもの！」


「それに…」
「それに？」
スピーカーからは女性の悲鳴あがる。
「この女たちのように無様な姿は晒さないわ！」
「無様…!?」
老婆の眉間にさらに深い皺が刻まれる。
「いいでしょう、やりなさい麗亜。準備は整えます」
「ほんと？ありがとうおばあ様！」
麗亜に抱きつかれた老婆の顔には、少しの綻(ほころ)びもなかった。


「会長本当によろしいのですか？ええ、ええ、承知しました。既に先方の家に来ていますので…」
スマホを切るとため息をついたのは、背が高く青い髪、奇妙な仮面をつけた女性だった。
彼女は榛桐財閥会長付きの秘書、名を『エリーシャ』と言った。
裏の格闘技犬会『Valkyrie Fight』は彼女が万事取り仕切っている。
古い日本家屋には『合気道 火野会館』という看板が掛かっている。
呼び鈴を鳴らすと奥の方から声がした。
合気道 火野会館


「お待ちしてましたわ、エリーシャさん」
出迎えたのは見かけは歳の頃、二十歳半ばの黒髪の女性だったが、佇まいはさらに年上に感じさせた。
「火野様、お迎えに上がりました」
エリーシャはうやうやしくおじきをする。
「随分とご無沙汰でしたわね、もう声が掛からないと思っていましたもの」
この女性は「合気道火野会館」当主、名を『火野鞠子（ひのまりこ）』と言った。
合気道 火野会館


「決めるのは会長ですので、そこはなんとも…」
言葉をはぐらかす。
「別に責めているわけではありませんわ、
今日が楽しみだったというだけです」
「それでは車の方へ…」
促された鞠子はしずしずと歩みを進める。
その瞳の奥が紅く揺蕩っているのを
エリーシャは見逃さなかった。
合気道 火野会館

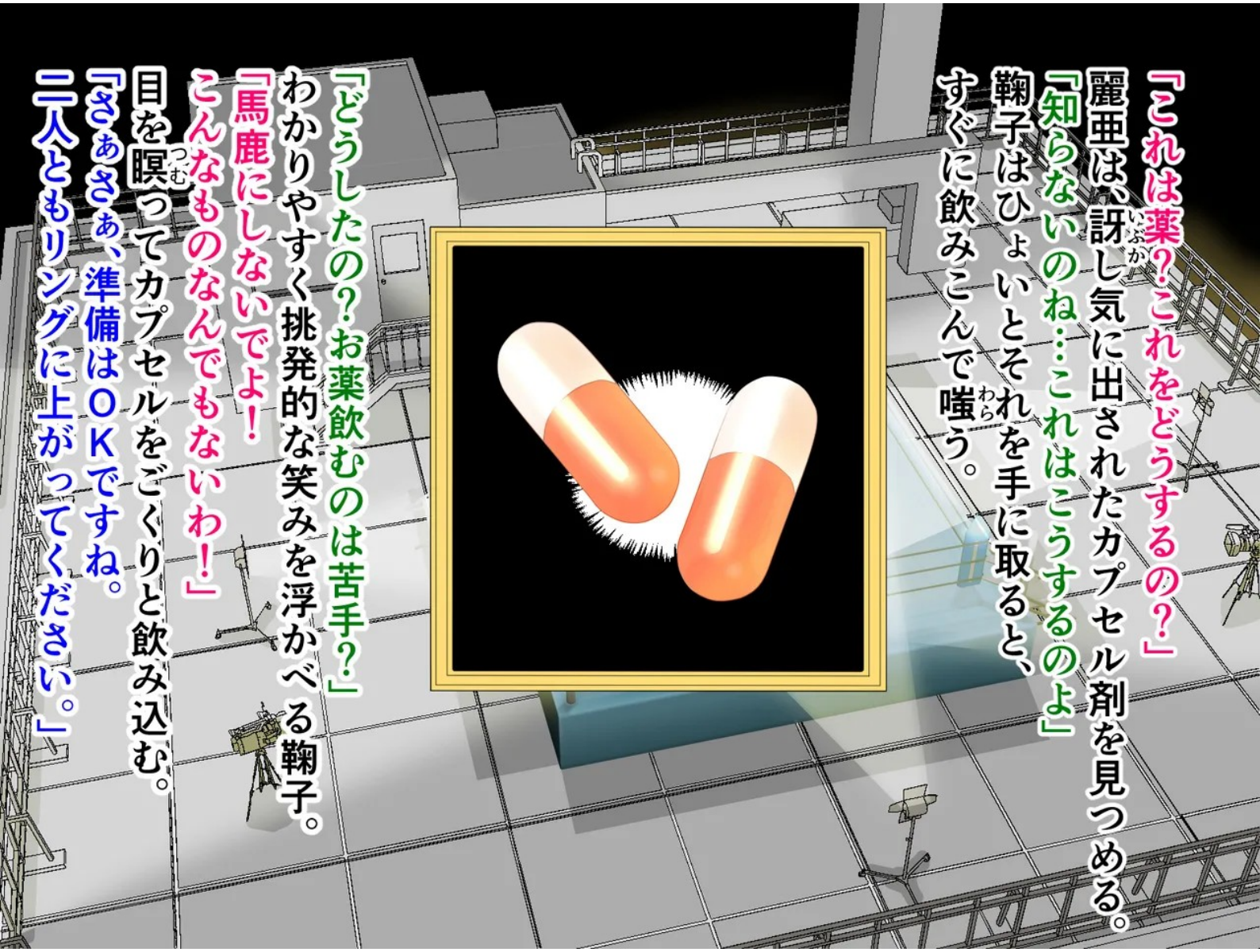

「お嬢様、到着しました」
エリーシャが後部座席のドアを開けると
麗亜がピョンと飛び出した。
「ここが会場？地下闘技場じゃないのね」
「相手の闘技者は先に着いておりますので、
控室で着替えを済ませてください」
「まぁなんだっていいわ！私がどうせ勝つんだし」
麗亜は自信に満ちた笑みを浮かべながら、
ビルのエントランスへと駆けていった。


「屋上にリングがあるなんて、洒落てるじゃない」
高層ビルの屋上に不釣り合いなリングが、ライトに照らされて浮かんでいるようだった。
「今回は地下闘技場ではなく、当社所有のビルにリングを設けました」
「ふうん。で、私の相手はどこなの？」
麗亜はきょろきょろと辺りを見回した。
「先にリングに上がってらっしゃいますよ」


「やっと来ましたのね、待ちくたびれていたところです」
麗亜はリングの上から響く声に、視線を移す。
「貴方が可哀そうな私の相手ね！」
キッとした瞳で鞠子を見つめる麗亜の瞳が
胸の辺りで見開いた。
「あっ！む…む～…」

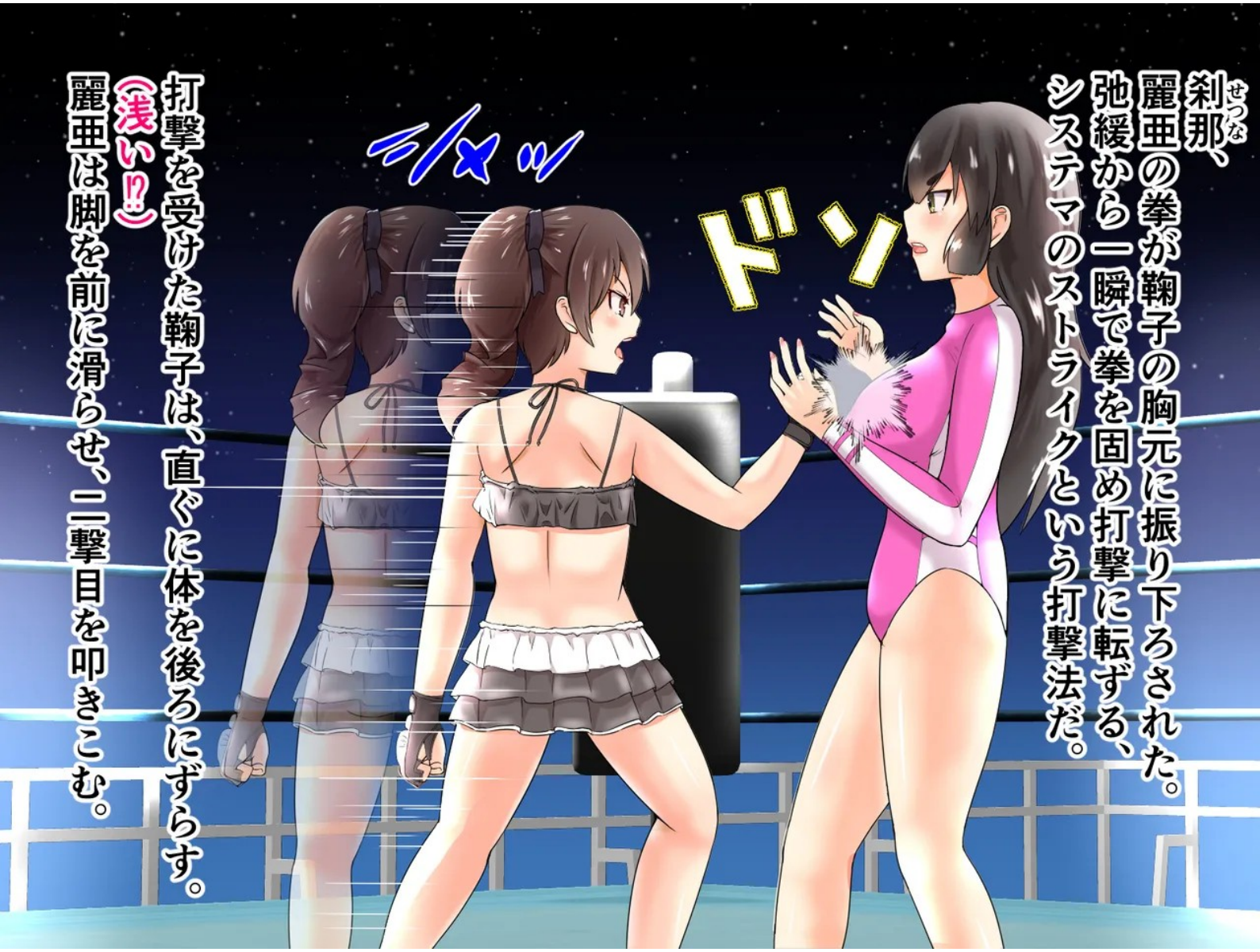

「あら、なにかしら？」
麗亜の視線の先に気付いた鞠子は、
胸を突き出して体をくねらせる。
「ふ、ふん！
デカけりゃいいってもんじゃないわよ！」
顔を赤らめながら麗亜は視線を逸らした。

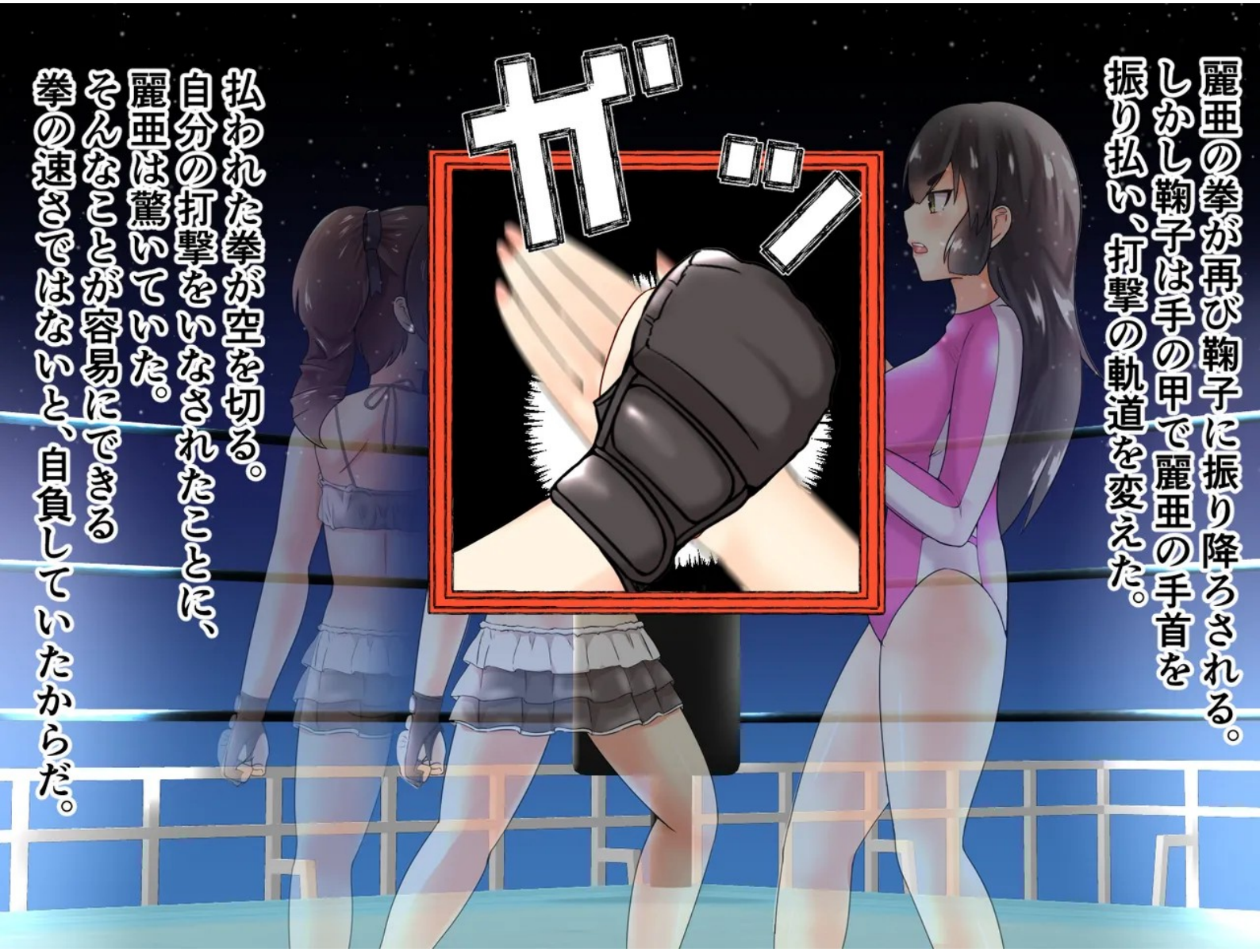

「まぁまぁお二人とも、時間もありませんので準備しましょう」
エリーシャがたしなめる。
「いいわ！いつだって私は行けるわよ！」
「私も大丈夫ですわ、早く始めましょう」
早くも二人は闘志に満ちている。
「ルールは既にご存知ですね？
では開始前にこの薬を飲んでいただきます」
エリーシャはポケットから、
ビニールに包まれた2錠のカプセル剤を
取り出した。

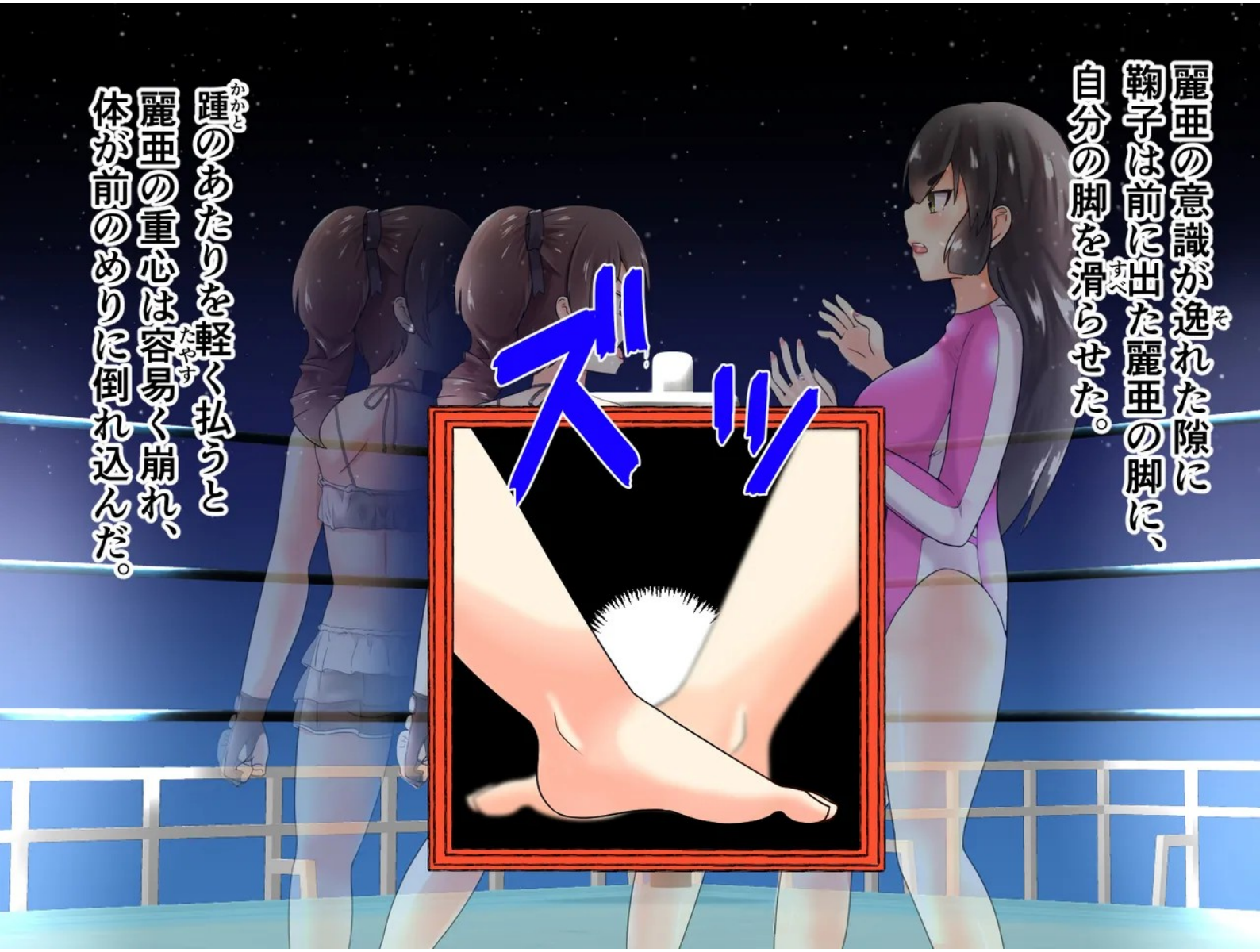

「これは薬？これをどうするの？」
麗亜は、訝し気に出されたカプセル剤を見つめる。
「知らないのね…これはこうするのよ」
鞠子はひょいとそれを手に取ると、
すぐに飲みこんで嗤う。
「どうしたの？お薬飲むのは苦手？」
わかりやすく挑発的な笑みを浮かべる鞠子。
「馬鹿にしないでよ！
こんなものなんでもないわ！」
目を瞑ってカプセルをごくりと飲み込む。
「さぁさぁ、準備はＯＫですね。
二人ともリングに上がってください。」


リングに上がると両者は早くも
中央でにらみ合い、火花を散らしている。
「二人ともコーナーポストについてください。
制御室からブザーを鳴らすので、
それが試合開始の合図です」
そういうとエリーシャは建物の中に消えていく。
ビルの屋上には強い風が吹きつけていたが、
闘技者の二人はそれを意にも介さず、
お互いから視線を外さなかった。


ブー！
ブザーのような音が鳴り響くと、
二人はゆっくりとリングの中央へ
歩み寄った。
スー…
両手を挙げて構(かま)えをとる鞠子に対し、
麗亜は腕をだらりと下げて
体を弛緩(しかん)させている。


刹那(せつな)、
麗亜の拳が鞠子の胸元に振り下ろされた。
弛緩から一瞬で拳を固め打撃に転ずる、
システマのストライクという打撃法だ。
ドン
打撃を受けた鞠子は、直ぐに体を後ろにずらす。
(浅い!?)
麗亜は脚を前に滑らせ、二撃目を叩きこむ。

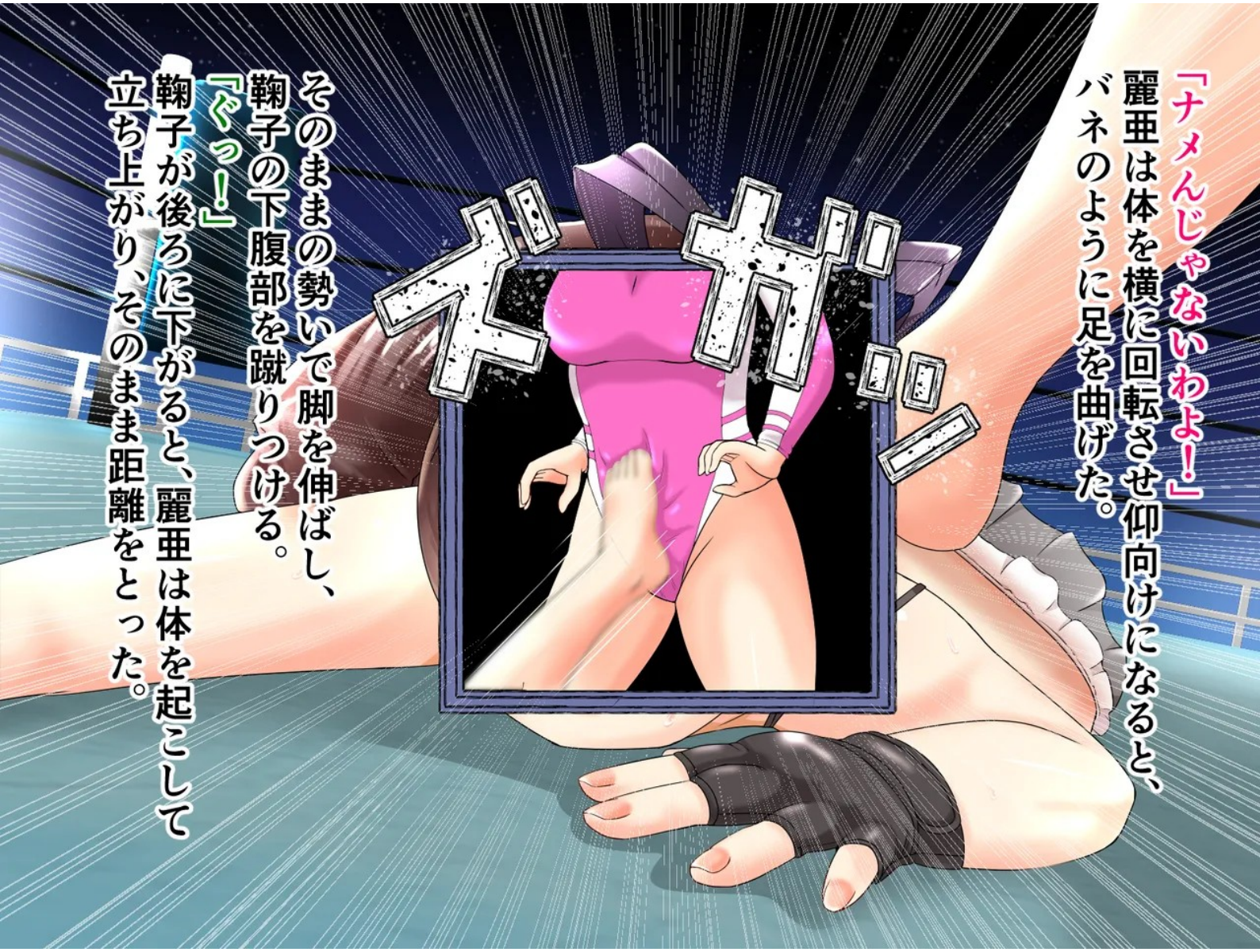

麗亜の拳が再び鞠子に振り降ろされる。
しかし鞠子は手の甲で麗亜の手首を
振り払い、打撃の軌道を変えた。
ガッ
払われた拳が空を切る。
自分の打撃をいなされたことに、
麗亜は驚いていた。
そんなことが容易にできる
拳の速さではないと、自負していたからだ。

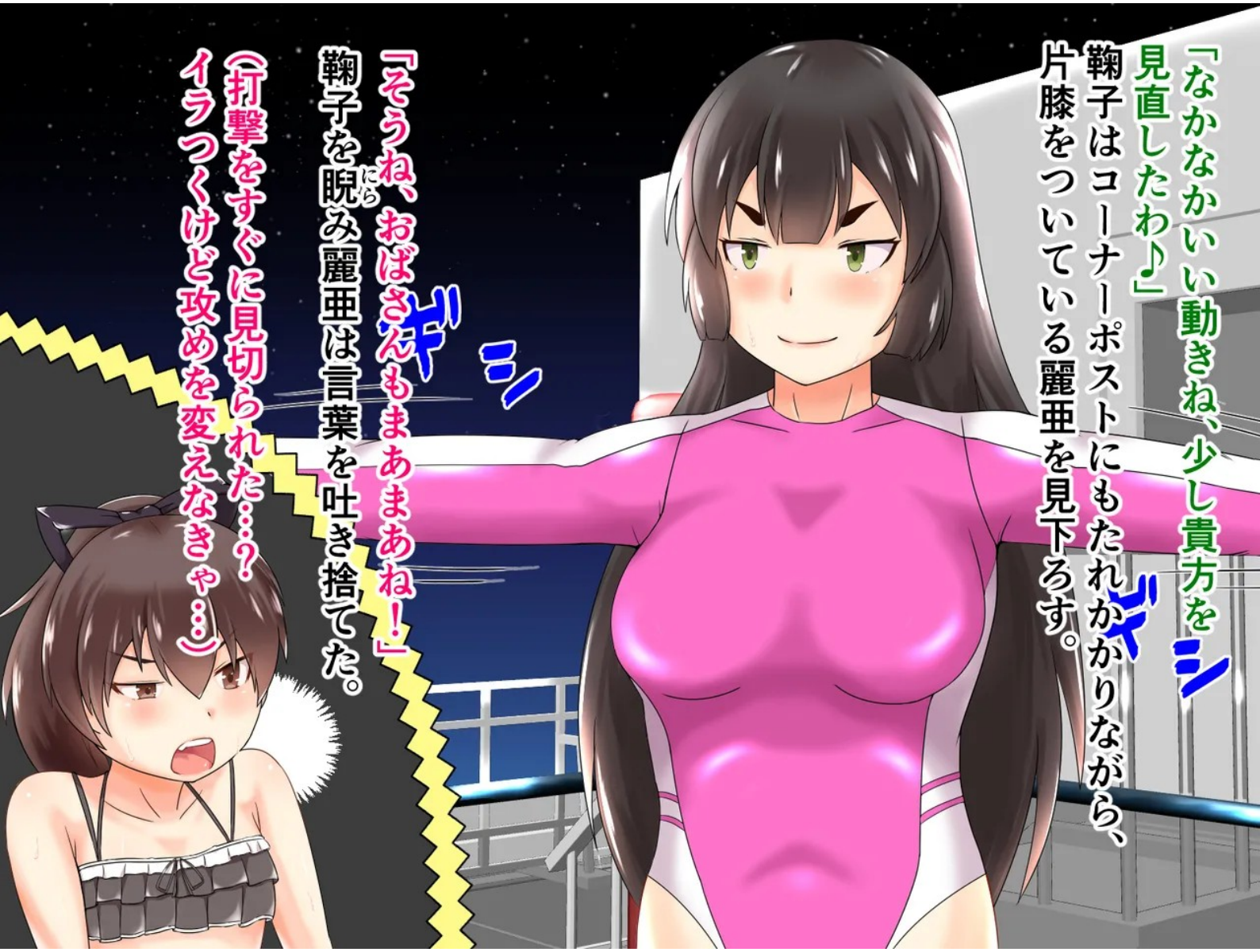

麗亜の意識が逸れた隙に
鞠子は前に出た麗亜の脚に、
自分の脚を滑らせた。
ズリ
踵のあたりを軽く払うと
麗亜の重心は容易く崩れ、
体が前のめりに倒れ込んだ。


「おぶっ！」
リングに体が叩きつけられる。～～
鞠子の体捌きに、麗亜は思考が追い付かなかった。
ドサッ
（ぐっ、なんで私が倒れてんのよ！）
とにかく体をおこそうと、意識を切り替える。


ドン！
麗亜の背中を鞠子の脚が、力任せに踏みしめる。
「あらあら、いい恰好ね」
鞠子はクスクスと嗤いながら脚を踏みしめ、麗亜を挑発する。


「がっ…」
麗亜は衝撃と圧迫感で声にならなかった。
ギリ
「どうしたの？まだまだ始まったばかりよ」
再び脚を上げて、踏みつけの体制をとった。


「ナメんじゃないわよ！」
麗亜は体を横に回転させ仰向けになると、
バネのように足を曲げた。
そのままの勢いで脚を伸ばし、
鞠子の下腹部を蹴りつける。
「ぐっ！」
鞠子が後ろに下がると、麗亜は体を起こして
立ち上がり、そのまま距離をとった。


「なかなかいい動きね、少し貴方を見直したわ♪」
鞠子はコーナーポストにもたれかかりながら、片膝をついている麗亜を見下ろす。
ギシ
ギシ
「そうね、おばさんもまあまあね！」
鞠子を睨み麗亜は言葉を吐き捨てた。
（打撃をすぐに見切られた…？
イラつくけど攻めを変えなきゃ…）


麗亜が考えを巡らせていると、
鞠子が言葉をつなぐ。
「貴方、恐い顔をしてるわよ、
少しリラックスしなさいな♡」
ウフフ♡
（このおばさん、なに言ってんの…？）
急に柔和な態度をとる姿を訝しんだ。
む～

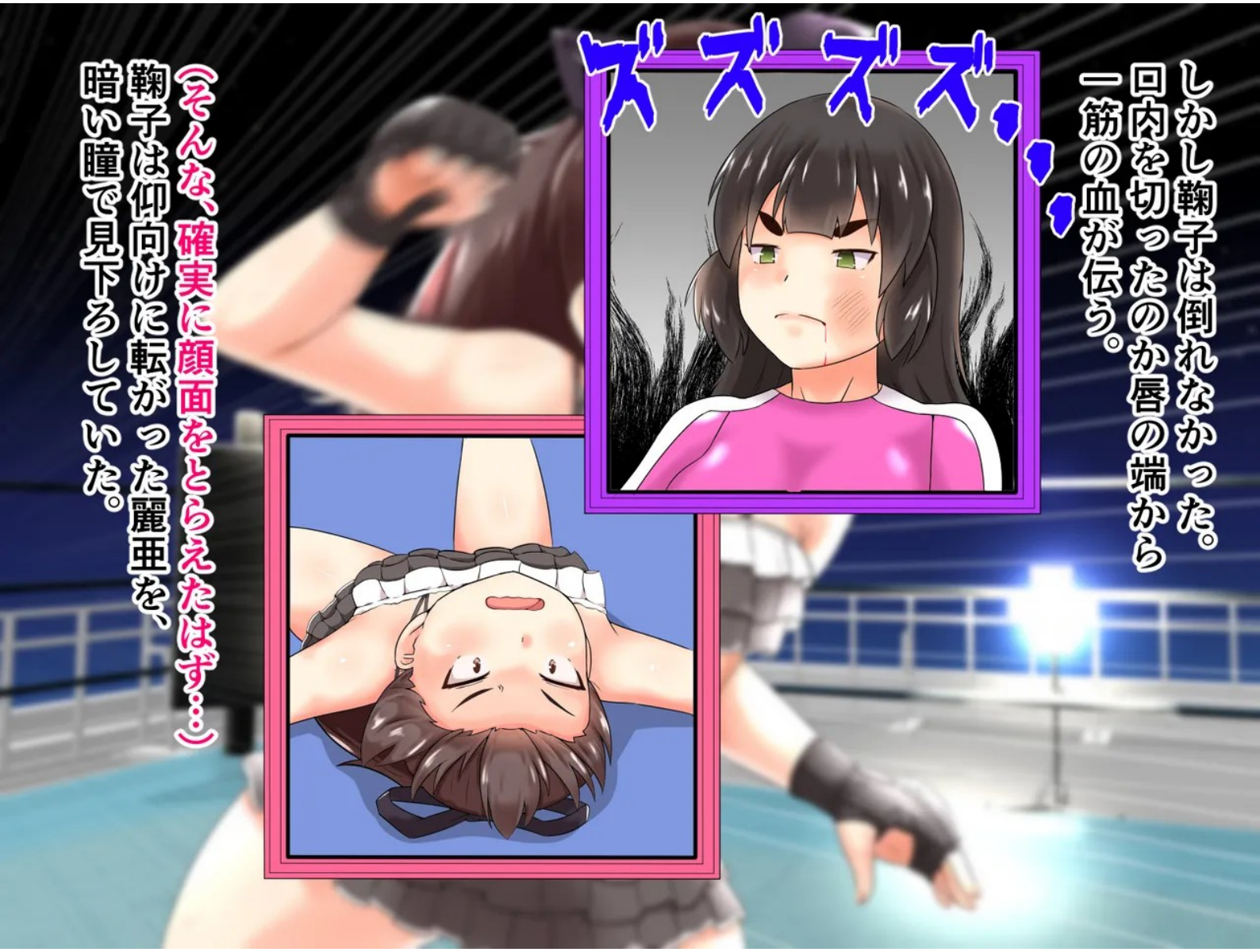

「感じない？体の火照り…
熱い芯の疼きを…」
鞠子はゆっくりと自分の胸を揉みしだき始める。
はぁ
はっ
むに♡
むに
!?
(はぁ!?なにやってんのこの人??)
麗亜は鞠子の突然の奇行に唖然とした。

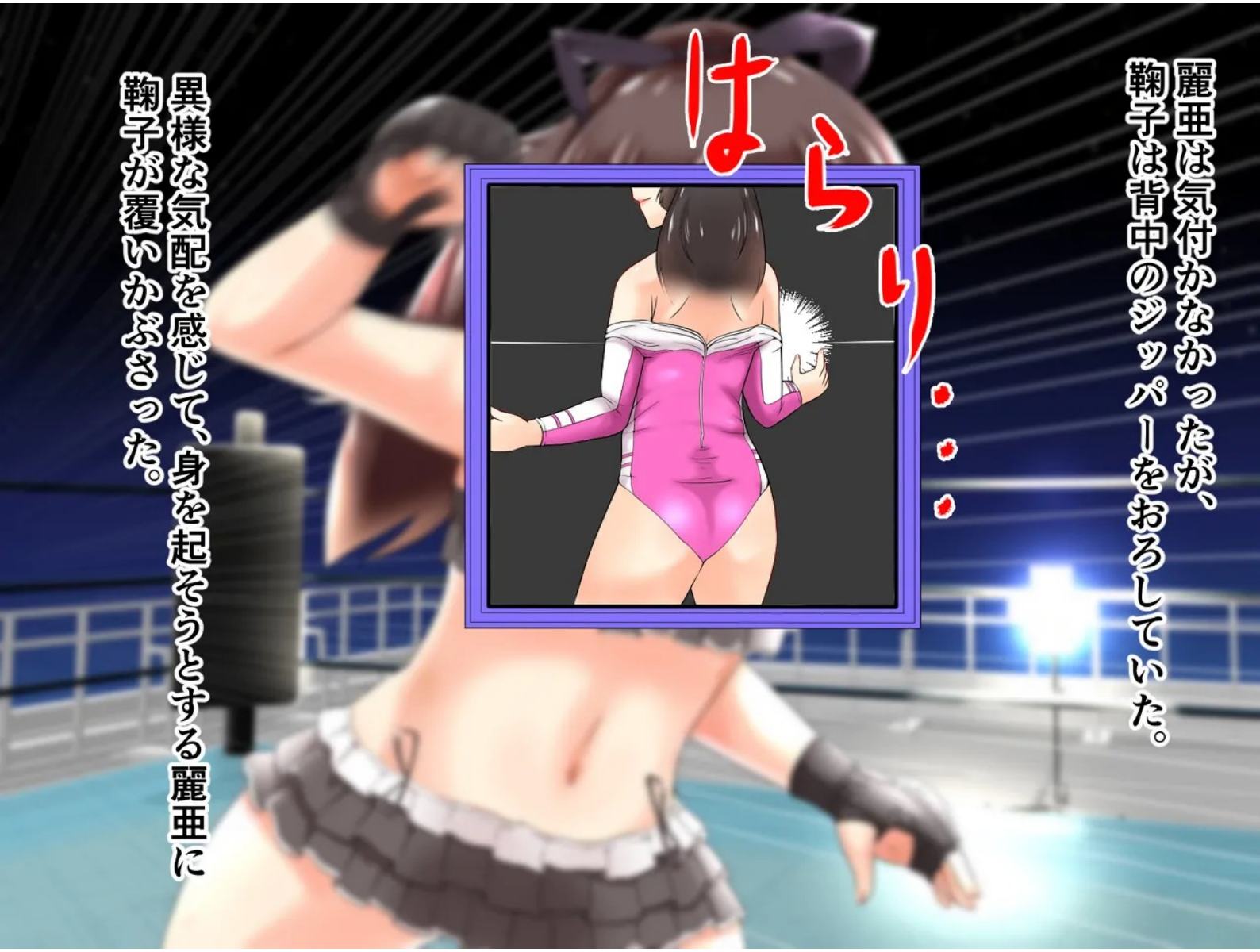

「貴方も感じているはずよ…
自分の体に問いかけてみて…」
鞠子はさらに妖しく問いかける。
ぺろっ♥
ふに♥
ふに♥
ゴクリ
（んっ…そういえば体が…）
麗亜は今まで感じたことのない
体の奥からの熱い鼓動に戸惑っていた。
（なんなのよ！
このままじゃ相手のペースに呑まれる！）


「はぁあああ！」
麗亜は鞠子に一直線に詰め寄る。
「もうヤケになったの？
可愛い子ね、いらっしゃい」
鞠子は脚を前後に開き、麗亜に対して斜めに構える。
Ｋｍ
（打撃を捌かれるなら、それを利用してやるわ！）
右腕をしならせ、大振りのフックのように鞠子の
側面から叩きこむ。
インパクトの瞬間に拳を握りしめた。

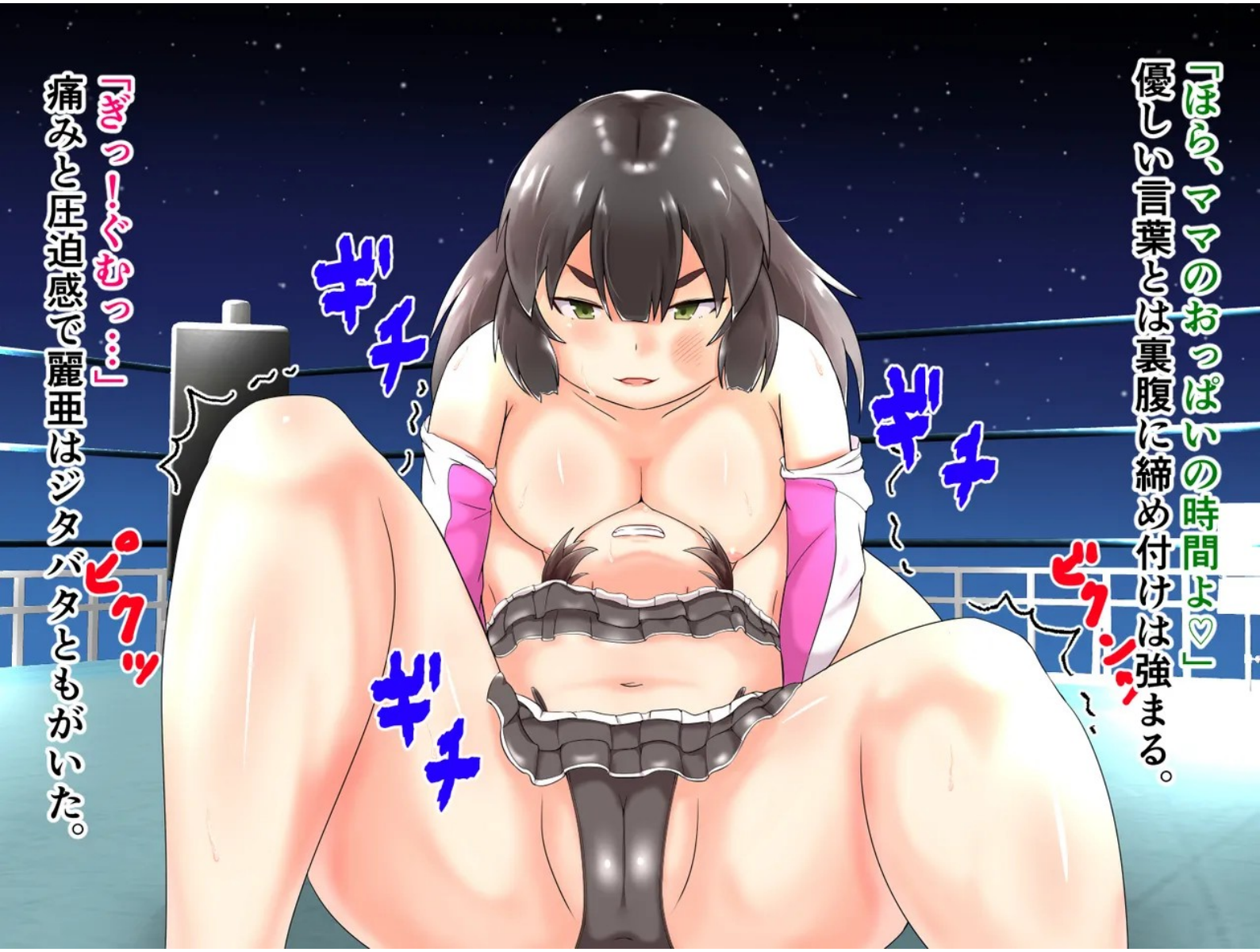

上体を逸らした鞠子は打撃の起動に合わせて
麗亜の拳を掌で横に押し込むように
払いのける。
《この拳速で捌けるなんてどういう神経
してんのよ！》
パァン
拳に全身を預けた麗亜は、
そのままよろけるかに見えた。
しかし、麗亜もそこまでは読んでいた。


麗亜はそのまま跳ね上がり、体を一回転させた。
側転蹴りのような軌道で、鞠子の顔にヒットした。
ガッ
「…っ！」
鞠子の顔が初めて歪む。
（当たった！どうよおばさん！）
麗亜は脚から伝わる感触を確かに感じた。


しかし鞠子は倒れなかった。
口内を切ったのか唇の端から
一筋の血が伝う。
ズズズ…
(そんな、確実に顔面をとらえたはず…)
鞠子は仰向けに転がった麗亜を、
暗い瞳で見下ろしていた。


麗亜は気付かなかったが、
鞠子は背中のジッパーをおろしていた。
はらり・・・
異様な気配を感じて、身を起そうとする麗亜に
鞠子が覆いかぶさった。


鞠子は麗亜にのしかかり、上体をホールドして動きを封じた。
「ぐっ！うぐっ…むー！むー！」
いきなり乳房で顔を圧迫され、麗亜は驚きの声を上げる。
ガミ
ぎゅうううう
「今のは少し驚いたわ…次は貴方の番よ！」
ギリギリと腕を締め付けながら、さらに圧迫を強めていく。


「ほら、ママのおっぱいの時間よ♡」
優しい言葉とは裏腹に締め付けは強まる。
ビクンッ
ギチ～～
ギチ～～
ギチ
「ぎっ！ぐむっ…」
痛みと圧迫感で麗亜はジタバタともがいた。
ピクッ


（くそっ！こんなものこうしてやる！）
とっさに麗亜は鞠子の乳房に歯を立てた。
ビクンッ
ギチッ
「あんっ！痛いっ！」
とっさの麗亜の攻撃に鞠子は悲痛な声を上げた。


麗亜の抵抗に、上半身にかけられた力が緩む。
ムニッ
（今だ、抜ける！）
緩んだ分だけ体の可動域が確保される。
麗亜の右足がマットを蹴った。


麗亜の膝が鞠子の顔の側面をとらえる。
完璧なヒットではないが、十分な衝撃
を与えていた。
ガッ
「がはっ！」
鞠子の上体が仰け反る。
麗亜はするりと肉体の檻から抜け出した…
かに見えた。

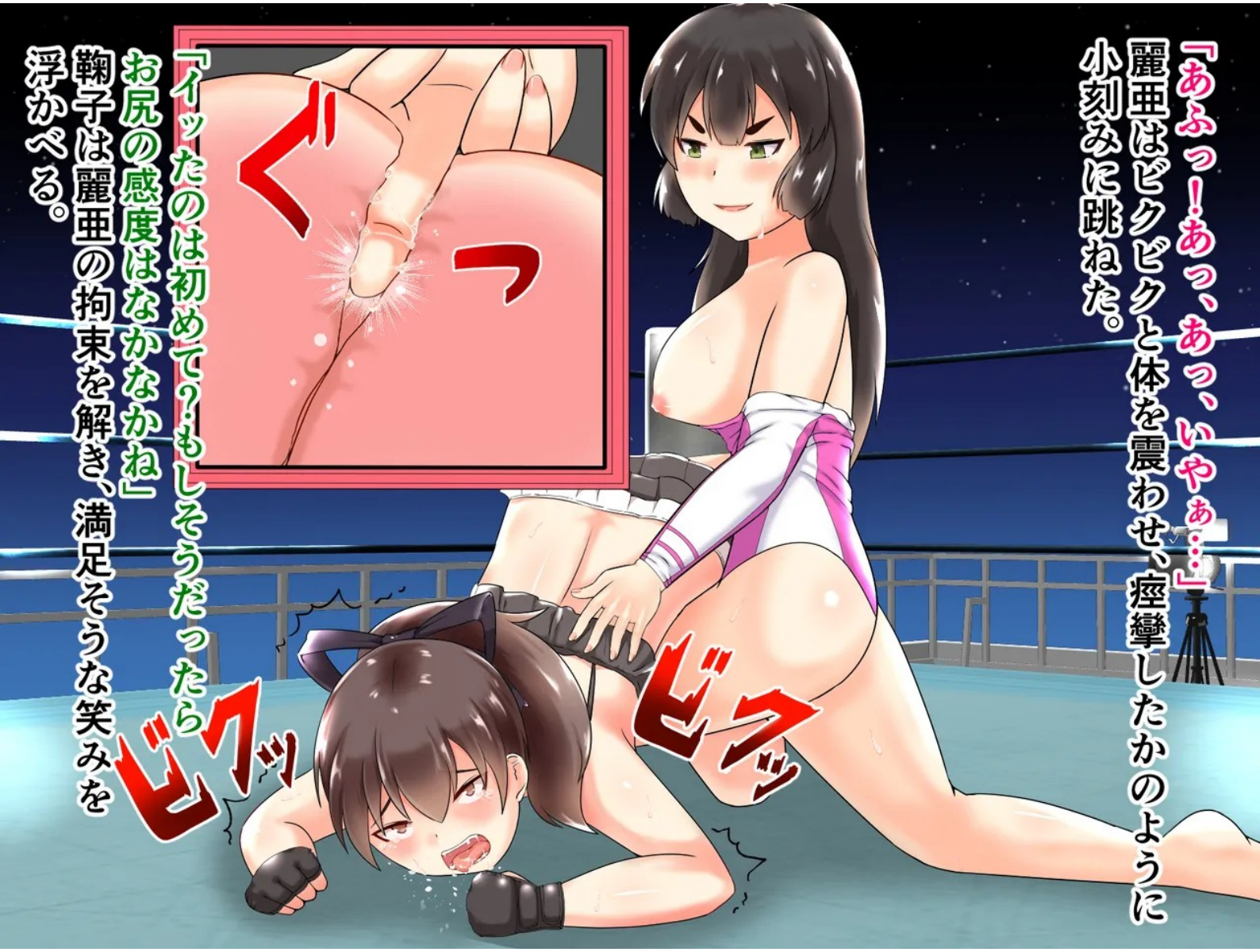

抜け出そうとする麗亜の腰を膝で浮かし、
逃げられないように体を制する。
ガシッ
「あらあら、逃げちゃダメよ、これからじゃない？」
（くっ、効いてないの？手応えあったのに！）
再び逃げ場を失い、麗亜はもがいた。


鞠子は麗亜の水着をひっぱり、お尻を露出させる。
ガイッ
「なっ、なにしてんのよ！離せ！このババア！」
顔を赤らめ麗亜は悪態をつく。


「ここを責められると、大の男でも抵抗できなくなっちゃうのよ」
鞠子は麗亜のアナルに中指を滑らせる。
ズズ
ぎち
ズズ
ぎち
「おほぉっ！や、やめて！」
いきなり自分の中に侵入してきた指に無様な悲鳴を上げる。
ビクッ♡
ビクン♡


鞠子の指は一転、腸壁をなぞるような
優しいストロークに変化する。
「おほっ、ひぐっ、やめ…気持ち悪い…」
言葉とは裏腹に、鞠子の指の動きに、麗亜は
敏感に反応する。
ぐにぃ
ぐにぃ
ビクッ
ビクンッ♥


「ふうん、ここかしら？それともここ？」
膣内を押したり、こすったり、
うねうねと鞠子の指が這いまわる。
じゃっぷ
じゃっぷ
「ひっ、ひっ、ぐっ…あんっ」
鞠子の責めがひたと止まる。
「みぃつけた♡」
不意に指に力を込め、ぐっと腸壁を押し込む。
ビクンッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡


「あふっ！あっ、あっ、いやぁ…」
麗亜はビクビクと体を震わせ、痙攣したかのように小刻みに跳ねた。
ぐっ
「イッたのは初めて？もしそうだったらお尻の感度はなかなかね」
鞠子は麗亜の拘束を解き、満足そうな笑みを浮かべる。
ビクッ
ビクッ


「ううぅ…もういやぁ…」
麗亜はよろよろと立ち上がり、
おぼつかない足で離れようとする。
麗亜はいままで感じたことのない、快感や
羞恥、痛みでうまく思考が働かなかった。


ガッ
「あらあら、どこへいくのぉ？」
「ひいっ⁉」
麗亜の後ろに張り付いた。
ユラ…
ギッ
麗亜の精神は恐怖に支配されていた。
とにかくこの化け物から逃れたい一心だった。


「悪い子はこうしちゃおうかしら♡」
鞠子は麗亜の水着を引きちぎる。
ビリ
「いやぁあああああ！」
露になった乳房をとっさに手で隠そうとする。
「可愛い声ね、ますます興奮しちゃう♡」


鞠子は麗亜の手を押しのけると
手で乱暴に揉みしだく
「いやっ！やめて！やめてぇ！」
ビクッ
ぐにゅ
ぐにゅ
「本当にやめていいの？
あなたの体は欲しがっているはずよ。
もっと正直になりなさい」
麗亜は全身がちりちりと焼けるような疼きに
包まれていた。


鞠子の手が乳首をつまむと
指でキュッとしめあげる。
「あんっ♡あっ、あっ、だめぇ♡」
はぁ♡
はぁ♡
ピクッ
きゃっ♡
ビクンッ
指の腹で乳首を揉んだり引っ張ったりと
緩急をつけて刺激していく。
「ほら、こんなに感じているじゃない」
鞠子は麗亜の耳元で囁く。


「こっちもそろそろ頃合いかしら？」
鞠子の手が麗亜の股間に滑り込む。
麗亜の体がビクンと跳ねたが、
特に抵抗はしなかった。
「ここは自分で触ったことあるの？」
「っ…」
麗亜は顔を赤らめながらも何も言わない。
ビクッ
さわ…
ビクンッ


麗亜は器用な手つきで、クリトリスを左右からつまみ、包皮を向いて露出させる。
露出したクリトリスの先端を、弾くように刺激する。
「あっあっ♡んっ…♡」
麗亜は腕をだらりとさげ、抵抗するそぶりすら見せなくなった。
クッ
ピクンッ


「そうよ…快感に身を任せるの、
もっともっと良くなれるわ…」
鞠子の声が諭すようにやさしく響く。
麗亜の指が大陰唇から、小陰唇、膣口へと滑り込む。
くちゅくちゅと卑猥な音が響く、
すでに受け入れ十分なほどに湿り気を帯びていた。
ビクッ
はぁ
くちゅ
ビクッ


「うぅん…♡そ、そこは許して…」
言葉では哀願するものの、
遠慮なしに鞠子の指がずぶずぶと沈む
鞠子の指に成す術もない。
「お尻とどっちがいいかしら？いい声聞かせてね♡」
膣内で麗亜の指が奥へ奥へと侵入する。
にちゅ♡
くちゅ♡
はっ
はっ


指の動きはさらに激しさを増し、
膣内をかき回す。
くちゅくちゅと淫猥な音を響かせながら、
愛液でぐっしょりと濡れている。
ビクッ～
ビクッ
くちゅ
くちゅ
「さあ、イきなさい！自分を解き放つのよ！」
鞠子は急に怒声をあげると、
麗亜の体がビクンと跳ねた。


「そ、そんな…あっ♡あんっ♡あぁあああああ!!」
それはまさに絶叫だった。
鞠子は麗亜を解放すると、麗亜はがくりと膝を付いた。
体はまだ小刻みに震えている。
ビクンッ
ビクッ
ビクッ
「素敵な声だったわ…私は貴方が屈服する叫びを聴きたかったの♡」
鞠子はうっとりとした目で麗亜を見降ろした。
「さぁ次は貴方の番よ」


麗亜のポニーテールを乱暴につかむと
鞠子は自分の股間に麗亜の顔をあてがう。
ウフフ
ダイッ
汗と興奮で濡れそぼった放香が、
意識が虚ろな麗華を淫靡に刺激した。
「やり方は教えたからわかるわね？」


麗亜はおずおずと自分の下を突き出し、
クリトリスの辺りを刺激する。
「そうよ…いい子ね、もっと口全体を使いなさい♡」
ピクッ
ピクッ
そう言われると麗亜は、唇でクリトリスを挟んだり
吸い上げたりと、ややぎこちない愛撫を続ける。
ぴちゃ
ぴちゃ


「あんっ♡そうよ！もっと激しく！」
鞠子の声は喜悦に濡れていた。
麗亜はさらに強くクリトリスを吸い上げて刺激する。
はぁ♡
ぢゅうう…
「クリばかりじゃダメよ、こっちもしなさい！」
鞠子は掴んだ麗亜の頭を、強引にヴァギナに誘導する。


麗亜は小さな舌先を尖らせて、
鞠子の膣内に侵入させる。
「おっおっ♡いいわ！続けなさい！」
鞠子は体を震わせながら命令した。
ビクッ
ぴちゃ
ぴちゃ
麗亜も倒錯(とうさく)したこの空間に呑まれ、
犬になり果てたように舌を動かしていた。


麗亜は鞠子の膣内で舌先を躍らせ、
献身的ともいえる奉仕を続ける。
ビクンッ
ビクン
しゃあああ…
鞠子は快感と征服欲に体を震わせて絶頂を迎える。
「もっとよ！もっと舐めなさい！
イクっ♡あっあんっ♡」

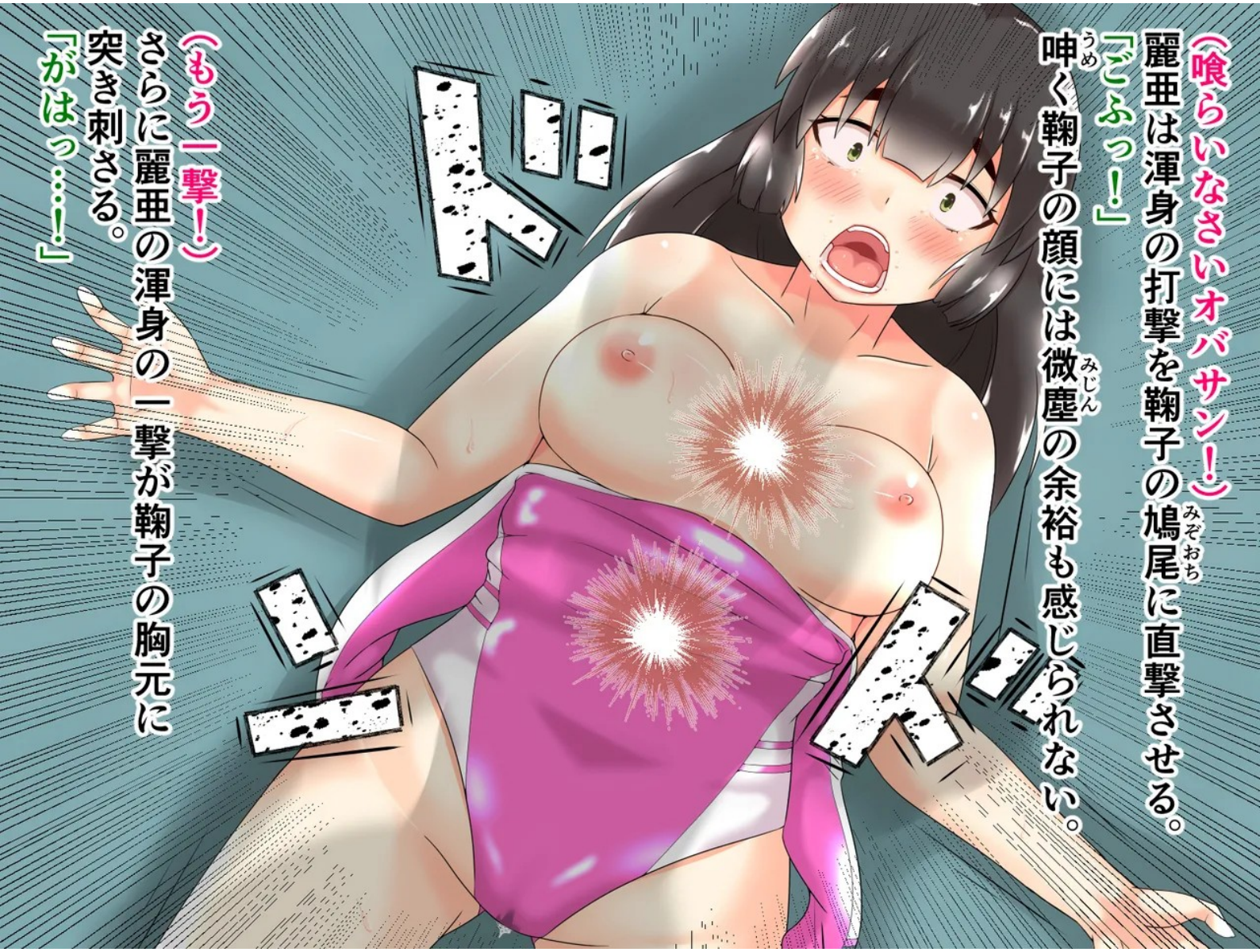

「クリトリスを擦り合わせるのよ、そう、そこでいいわ」
麗亜は鞠子のいいなりだった。
「さぁ腰を動かしなさい！」
「は、はい…」
麗亜は腰をゆっくりとスライドさせる。
はっ
はっ
くちゅ
くちゅ


「あっ♡あっ♡気持ちいい…」
「これが女同士のセックスよ、
さぁもっと激しく快楽を貪りなさい！」
鞠子に急かされ、犬ように腰を振る麗亜。
（もっと！もっと気持ち良くなりたい！）
思考のタガが外れたように快楽を求めていた。
はっ
はっ
にゅる
にゅっ
ふっ
ふっ


「はっ、はぁっ！イクッ！イクぅっ！」
麗亜はだらしなく舌を出しながら、
絶頂の渦に呑みこまれようとしていた。
はっ
はっ
はっ
ギシ
ぷる
ぐっ
ぷる
ギシ
あんっ
「私もイキそうよ！
腰を休めないで！もっと！もっとよ！」
二人の嬌声は熱を帯び、快楽に身を委ねていく。

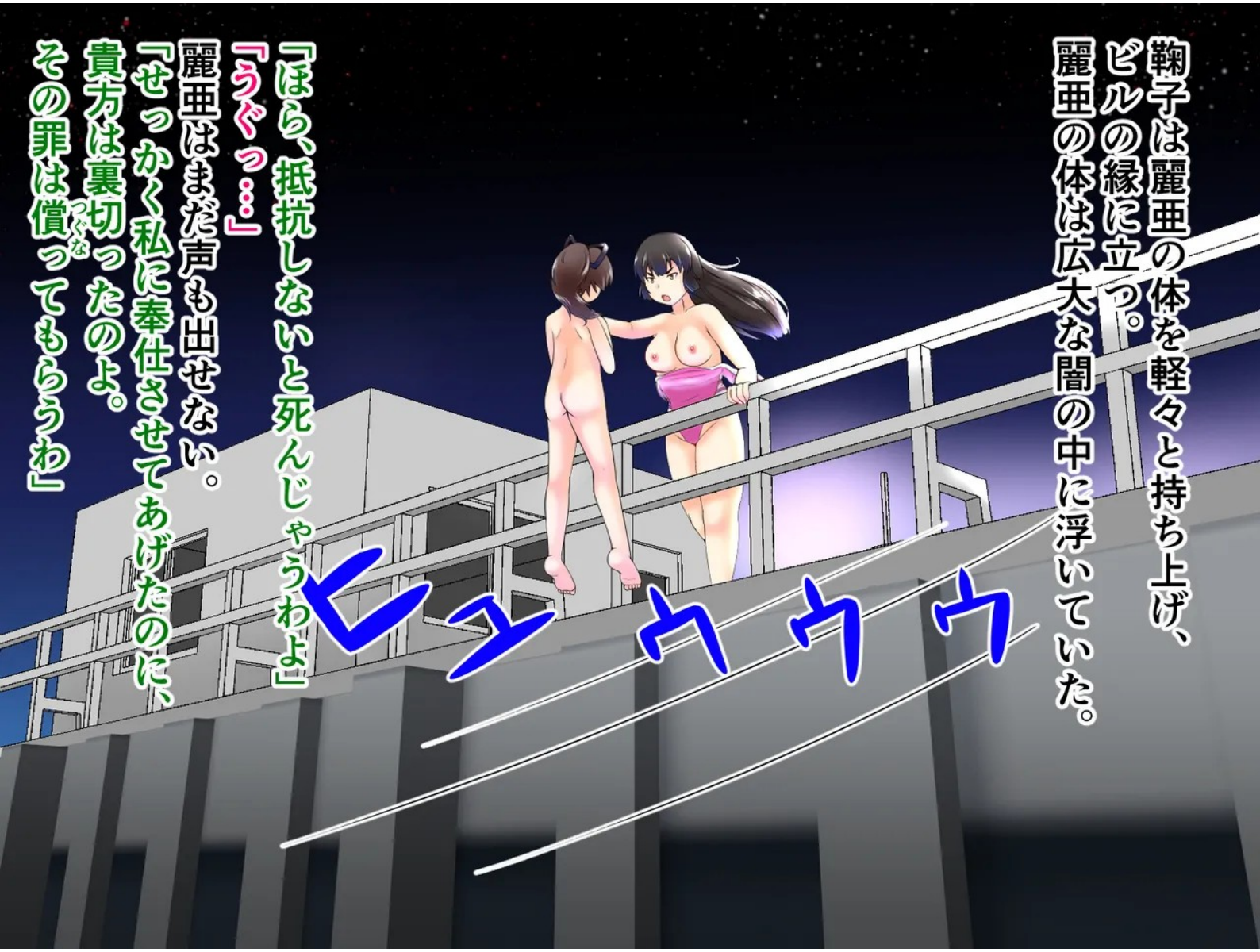

「あっ♡あああああぁぁ♡♡♡」
「はぁあああああ♡♡♡」
ビュクン!!
ピクン♡
ビクン!!
ニャアアア…
二人は同時に絶頂を迎えていた。
リングの上は快楽の坩堝と化していた。

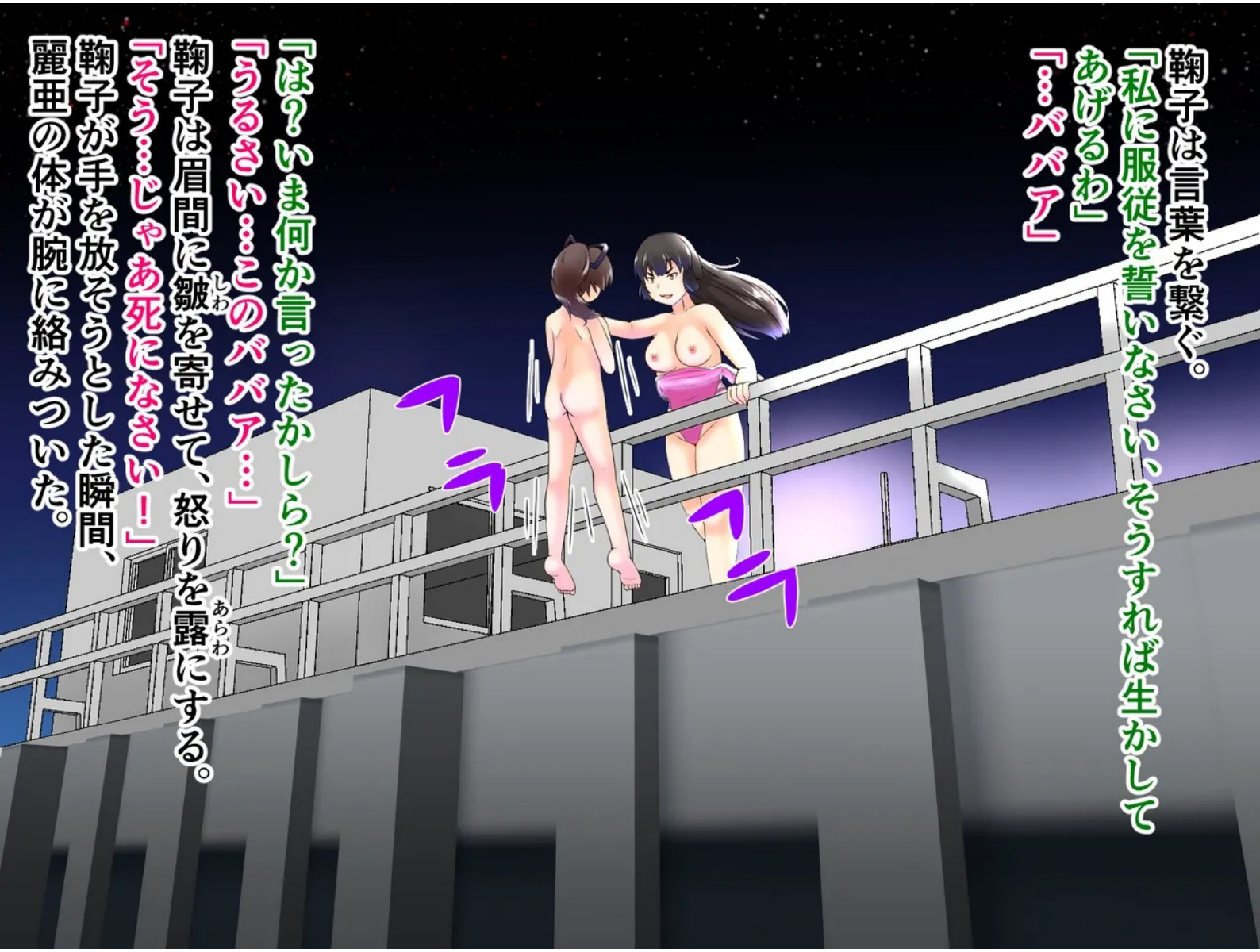

鞠子の果てる姿を観て、麗亜や少しずつ冷静さを取り戻す。
（私はなんで言いなりになってるの…？）
ビル屋上の風が体の火照りを覚まし、思考の霧が消えていくようだった。
（私は、榛桐財閥の後継者候補なのよ！相手を屈服させるのは私のはずよ！）
闘志を鼓舞し、幾分か、体に力を取り戻す。
（いまならやれる、呼吸を整えて！）
麗亜は自分の体にそう言い聞かせた。

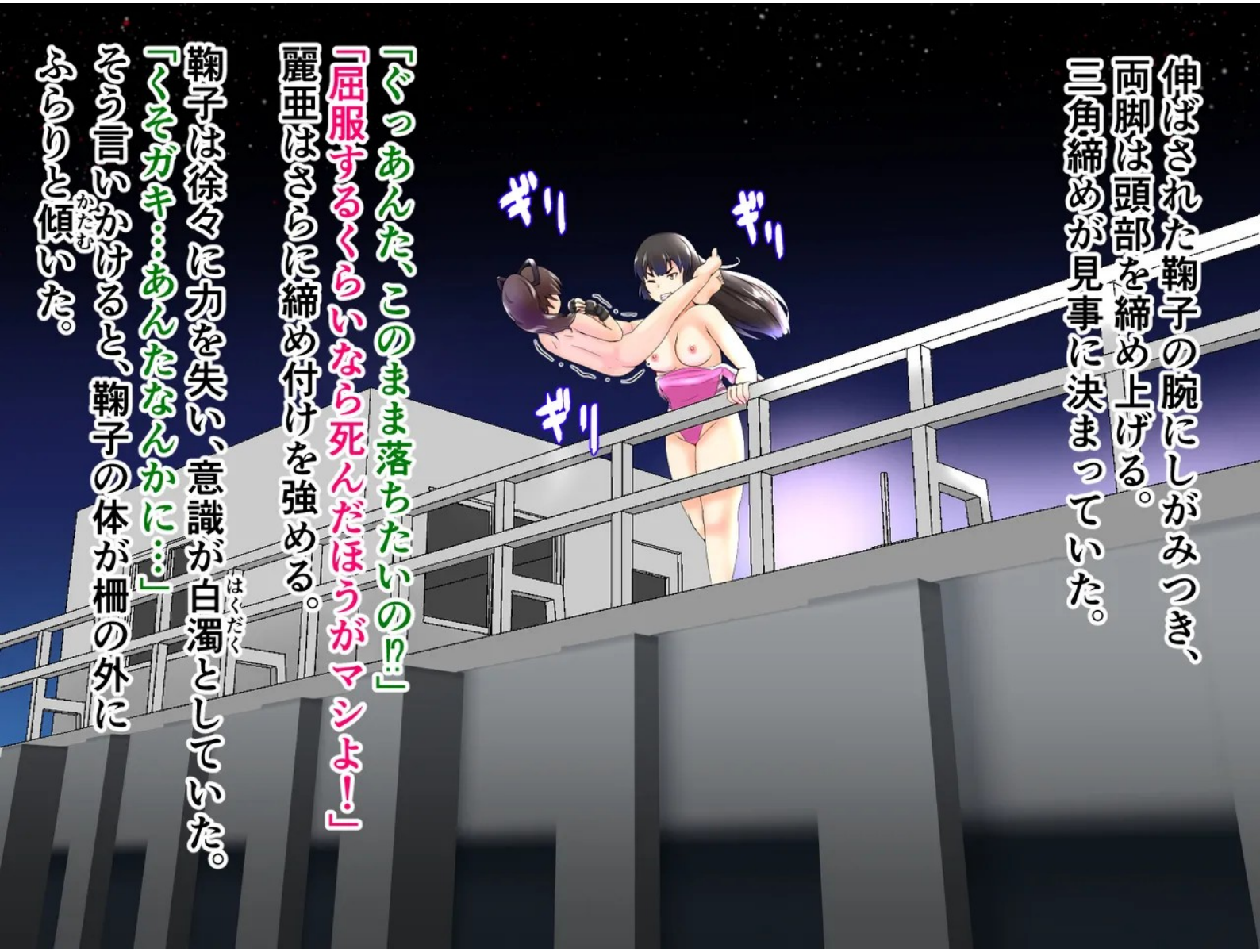

（喰らいなさいオバサン！）
麗亜は渾身の打撃を鞠子の鳩尾に直撃させる。
「ごふっ！」
呻く鞠子の顔には微塵の余裕も感じられない。
（もう一撃！）
さらに麗亜の渾身の一撃が鞠子の胸元に突き刺さる。
「がはっ…！」


「好き放題やってくれたじゃない、
こんどはあんたが這いつくばる番よ！」
麗亜は拳を叩きつけるように、鞠子の顔に
振り下ろす。
「…っ！」
鞠子は防戦一方だった。
しかし、その瞳に動揺は消えていた。
「あああああ！」
次第に大振りになる麗亜の拳を、見逃さなかった。


「死ね！死ね！」
麗亜は半狂乱になったように叫びながら拳を
振り下ろし続ける。
さらに大きく拳を振り上げた刹那、
それは起こった
ザシュッ
麗亜の喉元の鞠子の手刀が突き刺さった。
「かふっ！がっ…ひゅー…」
麗亜は喉元を抑えながら悶絶した。


鞠子は麗亜の体を軽々と持ち上げ、
ビルの縁に立つ。
麗亜の体は広大な闇の中に浮いていた。
ヒュウウウ
「ほら、抵抗しないと死んじゃうわよ」
「うぐっ…」
麗亜はまだ声も出せない。
「せっかく私に奉仕させてあげたのに、
貴方は裏切ったのよ。
その罪は償ってもらうわ」

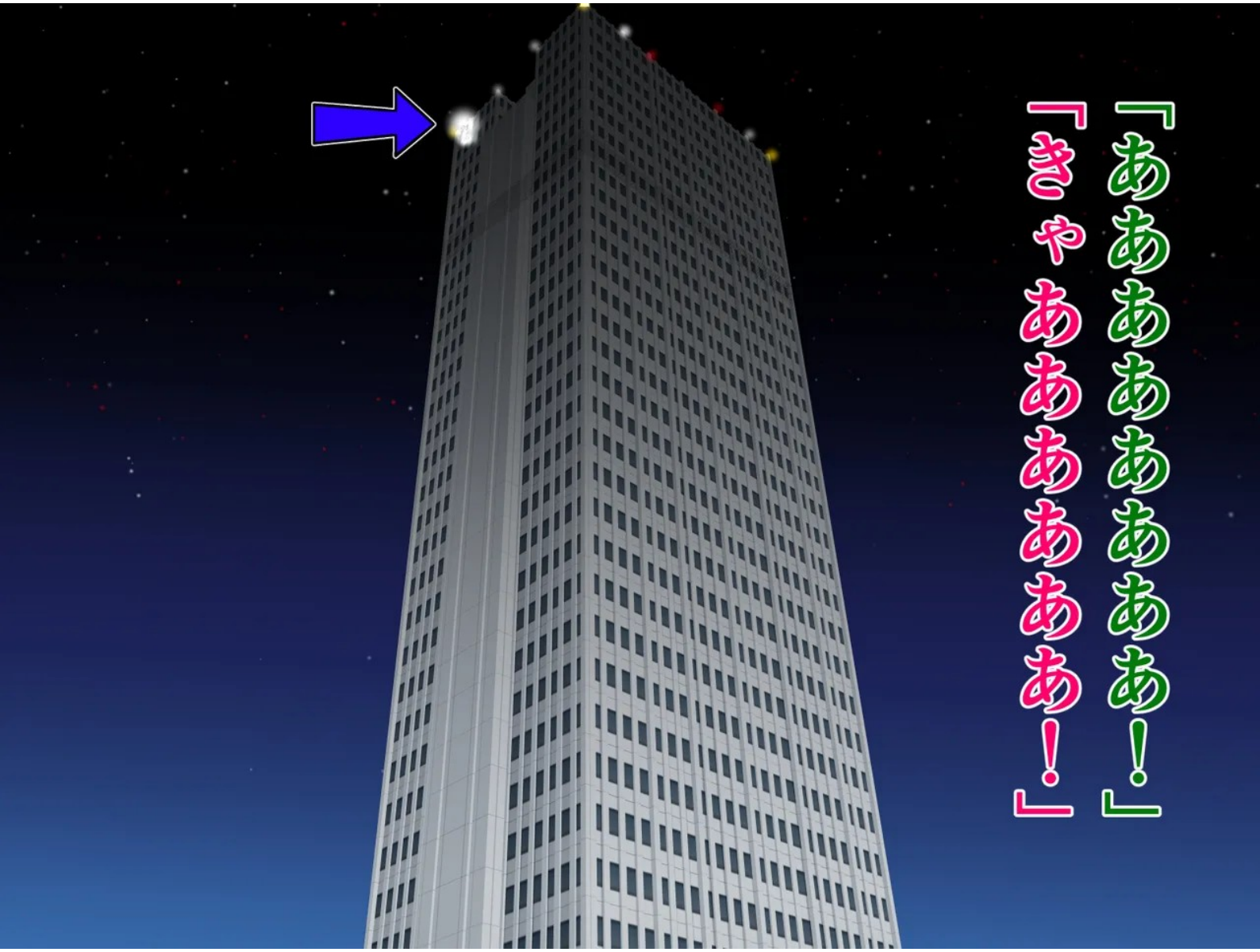

鞠子は言葉を繋ぐ。
「私に服従を誓いなさい、そうすれば生かしてあげるわ」
「…ババア」
「は？いま何か言ったかしら？」
「うるさい…このババア…」
鞠子は眉間に皺を寄せて、怒りを露にする。
「そう…じゃあ死になさい！」
鞠子が手を放そうとした瞬間、
麗亜の体が腕に絡みついた。



伸ばされた鞠子の腕にしがみつき、
両脚は頭部を締め上げる。
三角締めが見事に決まっていた。

「ぐっあんた、このまま落ちたいの!?」
「屈服するくらいなら死んだほうがマシよ！」
麗亜はさらに締め付けを強める。

鞠子は徐々に力を失い、意識が白濁(はくだく)としていた。
「くそガキ…あんたなんかに…」
そう言いかけると、鞠子の体が柵の外に
ふらりと傾(かたむ)いた。


「あああああああ！」
「きゃあああああ！」


どさっ!!
10階ほどの高さを落ちたところで、
勢いよく落下防止ネットが揺れた。
黒い網越しに浮かぶ二人の姿は、
虚空に浮かぶようだった。
ビクッ
麗亜はピクリとも動かなかった。
鞠子は呻きながらも、よろよろと体を
持ち上げようとしている。
「勝負がついたようですね」


エリーシャが上から縄梯子を投げた。
鞠子は縄梯子をつたって屋上にあがる。
「火野さま、お疲れ様でした」
「…」
「どうしたのですか?せっかく勝利されたのに…」
「イったのよ」
「と申しますと?」
「落ちるときね、今までにない快楽を感じたわ、
私はあの子の気迫にイかされたのね」
「はあ…」
「引き分けよ、私も遊びすぎたわ」


そういうと鞠子はビルの中に消えていった。
「闘技者とは不思議なものね」
エリーシャは鞠子の後ろ姿を見送った。
「あの人、最初から落下防止ネットに気付いていたのかしら・・・？」
ふとした疑問が沸き上がったが、考えないことにした。
「さて、麗亜お嬢様を引き上げますか！」


今日、このビルで起こったことは、誰も知らないし
誰も語らない。
ビデオに残された闘いの証は
一部の限られた者達の愉悦として残るのだ。
Valkyrie
Fight
03
完


ラガー
pixivID:536521
twitter:
@Twi2Ryu

